

米国駐在ファミリーの
グランドキャニオン川下り
泥まみれの谷底旅行記

GRAND CANYON RAFTING
A Wonderful Journey on the Muddy River

向井 淳一

Junichi Mukai

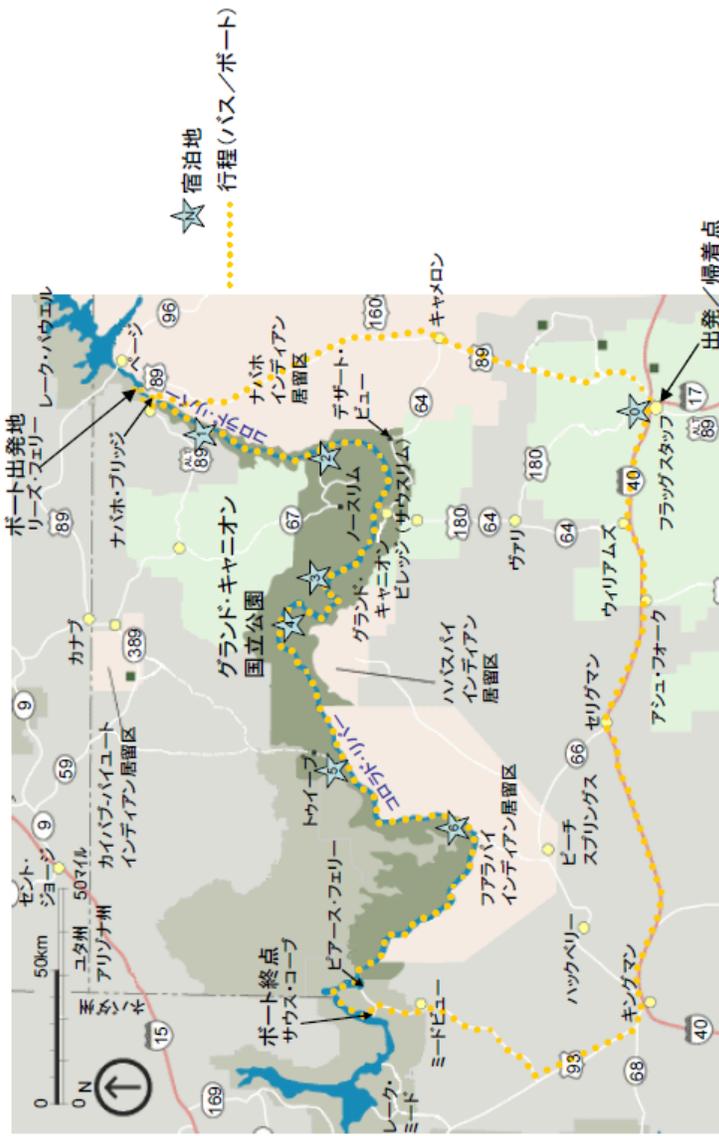


Copyright ©2009 Junichi Mukai, All Rights Reserved.
ISBN 978-0-578-02493-6

目次

はじめに	1
序章 グランド・キャニオンへの思い	2
第一章 家族会議	10
第二章 旅行準備	15
第三章 シカゴ出発	20
第四章 Day 1 (第一日目)	29
第五章 Day 2 (第二日目)	53
第六章 Day 3 (第三日目)	72
第七章 Day 4 (第四日目)	89
第八章 Day 5 (第五日目)	103
第九章 Day 6 (第六日目)	121
第十章 Day 7 (第七日目)	144
終章 エピローグ	156
付表 グランド・キャニオン内コロラド リバー浴いの名所リスト	160
巻末資料 グランド・キャニオン内 ハイキング時の注意事項	165

グランド・キャニオン国立公園、及びその周辺の地図／川下りの行程



はじめに

グランド・キャニオンというところは、実に奥深い場所である。谷が深いという意味合いではなく、いろいろな切り口から見るができるという面で、掘り下げれば掘り下げるほど、発見することが多いからである。地理学、地質学、地球の歴史、アメリカ近代史、気象学、植物学、動物学、天文学、観光、エコロジーなどなど挙げ出したらきりが無い。私はこの谷底を旅して感じた、家族や友人、日米比較文化、子育てなどという観点をこれらに加えてみた。そして、一介のサラリーマンとして疲弊した暮らしを抜け出して得た、一世一代の楽しさを、できるだけ多くの人に伝える一助にできたらと思い、少しずつ書きためたものを時間軸に沿って整理してみた。さらに、夫婦間の葛藤と駆け引きなどの人間模様も織り交ぜて、できたのがこの多国籍料理のようなエッセイ兼観光ガイドブックである。

運良く得た米国駐在員という立場を使って、たくさんの旅行をしているが、これほど深く思い出に残るものには、なかなか出会うことがないだろう。この旅行を通じ、あらためて家族と健康に暮らせることのありがたみを実感する次第である。

私は、たかだか数回の訪問で、決してグランド・キャニオンのエキスパートになったわけではない。しかし、この旅を通じて知りえたこと、またこの旅の後にも多くの文献を手にする事で、たくさんのことを学ぶ機会を得た。私のグランド・キャニオンへの興味は、旅によって完結したのではなく、旅を経てさらに強くなったと言えそうだ。そのすばらしい体験を私の独断と偏見に満ちた視点で綴ったのが以下のストーリーである。この拙文を読んだ日本人が多く、この地を訪れ、お互いの経験談を共有できることを願っている。

序章 グランド・キャニオンへの思い

アメリカのグランド・キャニオン国立公園を訪れたことのある人なら、必ずやその大きさと深さに圧倒されることだろうと思う。しかし、崖の上から、浸食で削られた深い谷を見下ろす、一般の観光ルートからは、想像もできない世界が谷底には広がっていることを知らない人は多いだろう。

グランド・キャニオンと私の接点は、本書のテーマとなっている川下りの旅以前に6回ほどあり、古くは1960年代後半にさかのぼる。当時、5-6歳の子供だった自分には、その思い出はあまり深く刻まれず、その素晴らしい光景も、自分の目で見て脳裏に焼き付けたものやら、或いは後から写真を見て再生したものやら、今ではよく分からなくなっている。その当時を考えると、日本から旅行で当地を訪れるなどということは、よほどのセレブか金持ちでもなければ機会がなかつただろう。私の家庭は、父の代にも米国駐在員として、アメリカに三年ほど住んでいたため、グランド・キャニオンとの接点が幼少の頃にできた。

その後、22歳の時に一人で米国を旅行した時に、再びグランド・キャニオンにやってきた。ここで見たIMAXシア

アイマックス
ターのフィルムによって、グランド・キャニオンの底に川が流れていること、昔の人たちが未開地の探検として、初めてコロラド・リバーを下り、谷底を転々とキャンプしながらサバイバル



グランド・キャニオンをサウス・リムから見た光景—この谷底はどうなっているのだろうと想いをはせた人も多いはず

の旅をしたことを知った。このフィルムで見た迫力のある映像が、自分の中で「いつか、この谷底を旅してみたい」と思わせる種になっていた。その種は、植えられてから20年間芽を出すことなく、ずっと心の中にしまわれていた、と言うよりも忘れられていた。

それから、丁度20年経ったときに、今度は私自身が米国駐在員となり、家族でグランド・キャニオンに2006年の3月に再びやってきた。私の家族は、妻と、この時7歳の長男、5歳の長女という構成である。いつかは、谷底を旅したいという気持ちがまた芽生えてくるものの、小さな子供たちではさすがに歩ききれないことが予測され、谷底まで行くことはできないだろうと思われた。グランド・キャニオンのビジター・センターなどでもポスターで訴えているのが、『日帰りで谷底まで行って帰ってくるような無謀なことはしないように』ということ。確かに、自分の中で「もしかしたら、できるかも・・・」という小さな野心はあったものの、危険さをここまでアピールされると、さすがにその種をそのまま発芽させることはできなかった。

それでも少しぐらい谷を下って、下からあの断崖を見上げたら、どんな風に見えるだろうという感触ぐらいは知ってみたかったので、突如、トレイル（散策路）を歩くことを決めて、家族を谷に引きずり込むことになった。トレイルの中でも、体力的に厳し過ぎないBright Angel Trail（ブライト・エンジェル・トレイル）を選び、その先に何があるかも分からないままに谷底に向かって歩くことにした。

家族旅行では、即興曲のごとく、その場でいろんなことを決めて行動することが多いので、当然家族はグランド・キャニオンで何をするのかは分かっていない。それでも、命綱の食料と水分はホテルで調達してあったので、トレイルを歩いても何とかなるだろうとは思っていた。

この「食料」というのが、時折やることなのだが、前日の食べ残しなどで作るサンドイッチである。ロードサイドのモーテル型のホテルでは、大抵朝食が付いているので、

食パンを少々大目にもらっておいて、何かを挟み込めば、サンドイッチができる。この日の具体的なメニューは前日



子供たちにもすこぶる評判のよい「残り物サンドイッチ」

のケンタッキー・フライド・チキンで食べ残したチキンをほぐしてパンに挟み込んだものである。それとバナナなどをリュックに背負い込んでおいた。この非常用昼食作りは、父親である私の朝の仕事で、通常家族が眠っている間に遂行される。

そして、グランド・キャニオンのトレイル歩きがスタートした。

当然、サウス・リムでスタートしてからは、延々下りである。3月末のグランド・キャニオンは、谷の上に雪が積もっていた。トレイルは、ぬかるんで滑りやすく、下りとは言え慎重さを要求する。スタートは10時半ぐらい。歩き出してしばらくしたら、もう腹が減ってくる。やっぱり昼ごはんを食べようということになり、早速サンドイッチが登場する。簡単に作ったものでもアウトドアで最高の景色を見ながら食べれば、どんなものでもおいしく感じられるもの。今でも「あの時のサンドイッチはおいしかった」とよく子供たちが言ってくれる。大きな岩に腰かけ、たくさ



Muleに乗った一団がBright Angel Trailを降りる。突然、暴れて谷から落ちることなどないのかと心配...

んの人に抜かれて行ったが、マイペース、マイペース。気にすることはない。食べ終わって休憩したらまたスタートした。

フライト エンジェル
このBright Angel
トレイル
Trailは、Mule（ミュー
ール：ラバ）に乗った
旅の一団が何度か通過

していく。この Mule が残していく糞尿が結構臭く、このトレイルに限って言えば、必ずしも常に新鮮な空気を楽しめるわけではない。

トレイルを歩くごとに、谷底にどんどん近くなって行き、休憩の小屋が 1.5 マイル地点、3.0 マイル地点に設けられている。上りの体力を残しておかねばならないので、わが家族の目標は 3.0 マイル地点の休憩所に定められた。

しばらく歩いた後に、3.0 マイル地点がやってきた。そこには子供たちの大好きなリスもいて、子供たちは元気にリスを追いかけ回した。『帰りのために 3 分の 2 の体力を温存しておくこと』とポスターなどで注意されているので、疲労困憊という状態で 3.0 マイル地点にたどり着いたわけではなかったが、一応の達成感を感じつつ、ここからサウス・リムに戻ることにした。家庭用のビデオカメラにも、「ここまでがんばったから、今から帰ります」と録画し、帰ろうとしたところ、子供たちが「折角ここまで来たから、もう少し行こう」と言い出した。「帰りは助けてあげられないから、絶対弱音を吐かずに帰れるんだよね？」と念押しして、下に向かって再スタートした。

3.0 マイル地点までは、私の子供たちと同じような年齢層の子供もトレイルを歩いていたが、ここから先に進んだ小さな子供はほとんどいなかったことは、下で後から気づいたことである。

しばらく歩いていると、長男の拓実がトイレに行きたくなり、走ってでも次のポイントに行かねばならなくなった。Mule^{ミュール}の糞尿がここまで落ちているなら、人間のだって少しぐらい混じったっていいだろうとも思えたが、とりあえず間に合うことを祈り、私と拓実が下に向かって走った。妻と長女の亜美はその後方をゆっくりコンスタントなペースで歩いていった。

当座、トイレを探すことが先行していたので、景色を見る余裕がなくなっていたが、用を足した後は心に余裕ができ、

たどり着いた Indian Garden (インディアン・ガーデン) という場所が新緑や花できれいな場所であることを知った。谷の上から、グランド・キャニオンの底に緑があることなど、想像もしたことがなかったので、子供たちに背中を押されてここまでやってきてよかったと改めて実感した。ここは、インディアン (正確にはアメリカ先住民) が耕作地として使っていた場所で、植物の栽培に適していたようだ。



谷の上は雪が積もっていたが、新緑や花が美しい Indian Garden

ここで、しばらく子供たちと遊んだが、さすがにこの先に行くことは考えず、果たして日没までに戻れるかどうかを心配するようなタイミングになっていた。本当はグランド・キャニオンに沈む夕日を見たいと常々思っていたので、何とか日没までに帰りたとは思って

いた。しかし、この Indian Garden にやってきて、岩ばかりの峡谷と思っていたグランド・キャニオンのイメージが大きく変わったことが、谷底を旅する夢の実現に大きな肥料となったことは事実である。

帰途につくと、ほどなく Big Horn Sheep (ビッグ・ホーン・シープ) が登場した。生まれて初めて、生で見る動物



出た！ Big Horn Sheep だ。グランド・キャニオンで見る初めての大型野生動物だった。

である。無論、写真では見たことがあったものの、グランド・キャニオンで突然遭遇するとは思わなかった。こういうサプライズは、なぜか疲れた身体を癒してくれるものである。もっともっとサプライズがいっぱいあればよ

いのだが、現実には非常に単調な上り坂、というよりは岩上りという感覚に近い。下りのぬかるみも大変だったが、当然 3060 フィート (930m) の岸壁を上っていくということは、ざっくり言って東京タワーを階段で3本分上るようなものである。7歳の拓実や5歳の亜美はもとより、自分自身がそんなことをできるのかさえ疑問だった。

亜美には、全部弱音を吐かずに上りきったら、リスのピンバッジを買ってあげるという約束をした。拓実は何のエサも約束しなかったが、彼はファミリーを先行してどんどん歩いていき、ペースを作っていた。亜美はいつものように妻と二人で歩いていたが、時折おんぶをねだった。それでも、わがままゆえのおんぶではなく、短期的な休憩で疲労を回復するためであろうことが伝わってきたので、妻がおんぶをしてあげていた。今思い返しても、自分には5歳の娘とは言え、背負っていく体力がなかったので、妻のがんばりと、亜美の「ママのおんぶじゃなきゃイヤ」という言葉に甘えつつ、「やっぱり持つべきものは年下の元気な女房だなあ」と独りで感心していた。

グランド・キャニオンを谷底方面に目を追ってみると、ほぼ垂直な岸壁と45度ぐらいの傾斜地の連続となっているのが分かる。垂直な岸壁を上っているときは、この岸壁を上りきったら、もうサウス・リムになっているに違いない、と思いながら上っていき、あと少しで上りきるという頃に、その背後からさらに岸壁が現れるという地形である。何度、あと少しという気持ちになって、裏切られたことか。とてもメンタルにも厳しいアップヒルだった。

さて、拓実はどんどん歩を進めていき、亜美は「リスのピンバッジ・・・リスのピンバッジ・・・」とつぶやきながらがんばっている。結局、おんぶの要請は、その高低差930m、片道距離7.2kmの行程で30-50歩を10回程度だったのだろうか。本当にほとんどを自分の足で上って帰ってきたのである。日没には間に合わず、回りは相当暗くなっていた。それでも夕暮れの薄明かりを頼りにトレイルを見ることが

できたのでよかったが、これ以上遅くなると、懐中電灯で道を照らさないと身に危険が及ぶ。もちろん手すりもネットも何もないところである。

家族は大きな達成感と共に、サウス・リムに帰ってきた。日ごろ、しつけの面で子供たちをついつい叱ることが多いが、この時ばかりは、自分の子供たちの強さを実感できて、親として目頭がつい熱くなるほど感動した。そして、その問題のリスのピンバッジは、元々はグランド・キャニオンの前に訪れた Zion National Park (ザイオン国立公園) で売っていたものだったが、グランド・キャニオンにもあるだろうとタカをくくっていたものの、どこにもない。仕方がなく、他の動物で間に合わせることになってしまった。

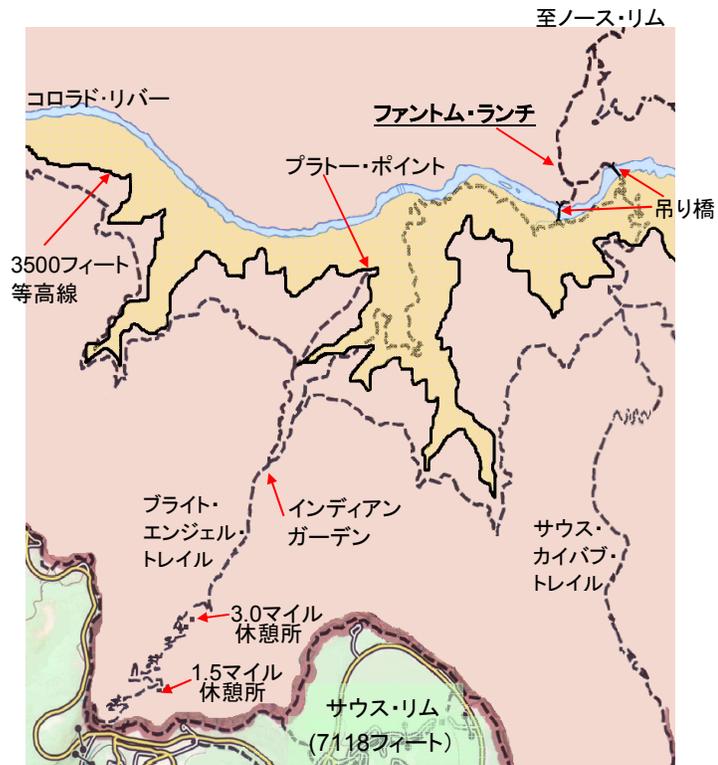
後日談だが、その後も別の機会^{ザイオン ナショナル パーク}で Zion National Park を訪れ、リスのピンバッジを探したものの、商品ラインアップを変えてしまったのか、その後もそのピンバッジにお目にかかることはない。これは、親の約束として未だに荷物を降ろせずにいるものである。いずれ、どこかで手に入れる機会に恵まれないかと、どこへいっても必ずリスのピンバッジは探すことにしている。

いずれにしても、この経験があって初めてグランド・キャニオンは私たち家族の中でインパクトの強い思い出となっているのである。もしもトレイルを歩かなかつたならば、印象はいくらか薄くなっても仕方がないであろうし、現に5-6歳の時にここを訪れている自分自身の記憶の量がそのインパクトの差異を物語っている。

このトレイル歩きの後、パーク内で簡単に食事をして、ホテルに帰った。翌日、今度はゆっくりもう一度サウス・リムから見ようということで、数箇所の展望台から峡谷を覗き込んだ。確かに小さく新緑がモシャモシャと生えているところが見える。「あれが昨日行った^{インディアン} Indian Garden^{ガーデン}か・・・」と感慨にふけていると、その先にコロラド・リバーに吊り橋が架かっており、さらにその先に

Phantom Ranch (ファントム・ランチ) という宿泊施設があることも確認できた。よし、次回来た時は、ぜひあのPhantom Ranch に予約を入れて、コロラド・リバーを触るまで歩くぞ、と決意を新たにグランド・キャニオンを去った。

【サウス・リムからファントム・ランチまでのトレイル・マップ】



第一章 家族会議

その後も数回、グランド・キャニオンを日本本社の人たちのアテンドで訪れたが、さすがに「トレイルを歩きましょう」と提案するだけの時間的余裕も通常ないので、お決まりの観光コースから、峡谷を眺めることにとどまった。それはそれで、毎回何らかの発見があるもの。私の視線は、自然と川に向かうので、8月に訪れた時と先回の3月とでは川の色が異なることを発見した。3月には雪解け水で比較的緑色が強いような気がしていたが、8月は泥の色である。これは、季節要因なのか、気候要因なのか……。謎は解かないまま、日にちは過ぎた。

大抵の家族旅行は、家長である私が勝手に決めて、「次はここに行くぞ」という宣言だけで、その後も企画、手配、ロジスティックス全てを自分が担当することになる。いわゆるバック旅行はしたことがないので、旅程、現地のアトラクション手配などは自己流で、かなりの部分が即興となる。また、いつもブーブー言わずについてきてくれる、よくできた家族メンバーに助けられてもいる。

2008年の2月ごろ、私たちが住むシカゴ近郊の日本人家族4世帯でホームパーティをしていたときのこと、これまでの3年の駐在期間にどんなところを旅行してきたかという話から、「次の目標は？」というテーマとなり、私がかねがねより思っていた「グランド・キャニオン川下り」の目標と、できれば2009年に実現したいという気持ちを述べた。口に出してしまったからか、気になり始め、少なくとも調査はしてみようと動き始めているうちに、行きたい気持ちの高まりを抑えられなくなってきた。以前、フェニックスのホテルでパンフレットを見て、そんな川下りツアーがあることは何となく記憶の片隅にはあった。川下りであろうと、Phantom Ranch^{ファントムランチ}の往復であろうと、最終的にはコロラド・リバーまでたどり着くことが最も大き

な目的だった。夏休みというタイミングでの予約の容易さから考えると、川下りの方が、空きがありそうに思われた。

このグランド・キャニオン川下りは、インターネットで調査し、資料を取り寄せ、家族で話し合うことにした。さすがに、これは全員のコンセンサスが必要だと感じたからである。私としては、かなり珍しい行為である。パンフレットを見せながら、いいイメージのみをできるだけ抽出して話すことを心がけ、家族の賛同を得ようという姑息な作戦をとった。ターゲットは家族票の過半数を得ることだったので、初めから子供たちからの二票を獲得することが主目的の会議だった。妻の立場は、よくて「中立」、悪くて「反対」。大抵、父親のやることを反対しない拓実は、反応が読めていたが、気まぐれな亜美がどんな反応を示すかが最も重要なテーマともなっていた。

「こんなに、楽しそうだぞ」とパンフレットなどを使って紹介したら、子供たちはすぐに「行こう!」と言った。ここで過半数が確定し、手配にかかることになった。どうせ、バイアスのかかった情報を与えて決めさせて、過半数を獲得するぐらいなら、初めから勝手に決めればいいじゃないかと思われるかも知れないが、それでも7歳になっていた亜美の強烈な反対があれば、この案を取り下げる覚悟は十分にあった。

さて、早速手配にかかることにし、ツアー会社を日程的な側面とコストから絞り込み、Rivers & Oceans (リバーズ & オーシャンズ) という代理店が手配する Canyoneers (キャニオニアーズ) を選択した。この選択が、当日の最高の思い出を演出することになるうとは、当然知る由もない。後から知ったことだが、この種のツアー会社は14社ほどもあり、Canyoneers は老舗ながらも小さな方から数えて2-3番目とのことである。確か、自分の意思決定の要素として、1930年代からやっているビジネスであることも、プラスに作用したように思う。これだけ、長い間こ

のビジネスにいられるならば、それなりの高いサービス品質は提供できるに違いないと。

あとは、旅程である。モーターを積んだボートのツアーなのか、手漕ぎのツアーなのか、会社を休めるのが1週間のみとなると選択肢はモーター・ボートに限られる。あとは、Phantom Ranch^{ファントム ランチ}まで降りてきて、そこからボートに乗る5日間のツアーと、逆にPhantom Ranch^{ファントム ランチ}までボートで行ってから、3日目にハイク・アウトするツアーもある。かつてIndian Garden^{インディアン ガーデン}まで往復した経験があるだけに、数泊分の重い荷物を背負って、トレイルを歩くのはたいへんそうだとすることは、容易に想像がついた。そこで、一週間のツアーということが、企画担当の私の中では簡単に決定された。あとで、「もう少し短いのはないの？」と妻に問われたが、「8月の猛暑にPhantom Ranch^{ファントム ランチ}まで歩くか、そこから歩いて出るかのどちらかを、荷物を背負ってやりたいと思うか？」という反論は、トレイル歩きの経験ベースを持つ妻の説得には十分な材料だった。

一旦決めたら、迷わないのが私の長所だと勝手に思っているが、ほぼ即決でお金を振り込んでしまった。前金で2,000ドル、残りの6,000ドルはツアー開始の90日前までに振り込むことになっていた。あつという間に、その90日前もやってきて、あとは突発の事故や怪我、病気などにならないように気をつけることが重要事項となった。事実、子供と庭で遊んでいる時も、お互いが怪我をしないように少々セーブしながら遊ぶようにしていた。それだけ、この機会をつぶしたくないという気持ちが強かったのである。五年ほど前、年甲斐もなくバレーボールでアキレス腱を切って、半年ほど不自由な生活を強いられたことがあるので、同じ過ちをここで犯すわけには行かない。

一応、家族会議で過半数の賛成を取ったとは言え、まだ妻の気持ちの中では手放しでOKという状態にはなっていなかったことが、気にはなっていた。本当に家族のメンバ

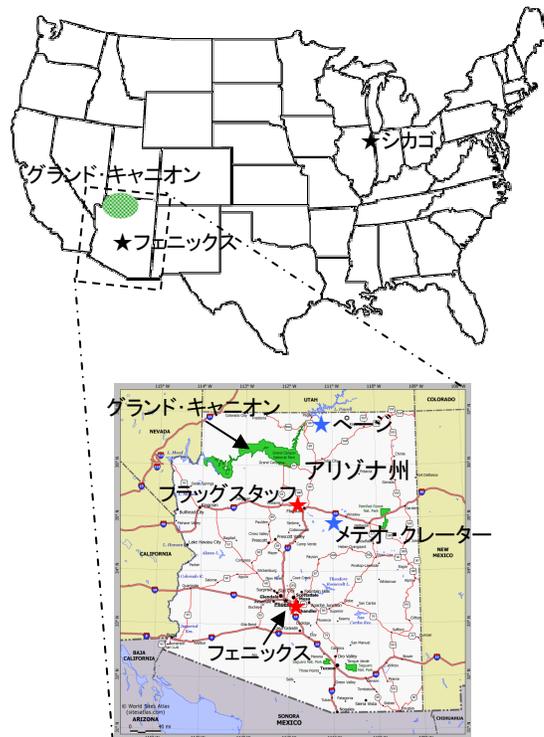
一に全員平等の一票を割り付けることが、フェアなのだろうか…。しかし、お金はもう払ってしまっているし、引き返すことはできない。そこで姑息にも考えたことが、プレゼント作戦である。反乱の芽をつぶすべく、妻の要求にはできる限りこたえてあげようというもの。「Dyson（ダイソン）の掃除機がほしい」と言われ、他の安い掃除機が5台ぐらい購入できそうな値段にもかかわらず、「グランド・キャニオンに文句を言わずに来てくれるなら、買ってあげることにしよう」と大盤振る舞いが始まった。他にも、Coachのアウトレットショップに行ったときには、バッグを3個も買ったり、普段では考えられないようなやさしい亭主になったりした。

行くことが概ね決まってしまうと、公言したくなるのが私の性格なので、知り合いのかなりの人が、この夏の私の予定を知ることになる。この伝え方が、当然行きたい人が話をするときには、いかにこの旅行を楽しみにしているか、どんなことを期待しているかなど、夢いっぱい話をすることになる。一方、妻はどんなリスクがこの旅行にはあるのか、こんなインチキ多数決で決めてしまった夫をどのように思うか、お付き合いのある奥さん連中に同意を求めるような伝え方になる。知人の反応は、本当にそれぞれで、奥さんたちの中でも「すごく楽しそうだ」という反応をする人、「でも、私にはできない」と否定する人、奥さんが興味を持って、旦那さんが引いている人などなど。中には日本での清流下りで、ボートが転覆し、未だにその手のアクティビティがトラウマになっている友人もいた。周りがどんな反応を示そうとも、全く無頓着で、ネガティブな意見は聞き流す。危ないタイプのプラス思考であるが、未だ人生で大きな失敗をしたことがないのが、この性格を維持することにつながっている。数多くの反応に遭遇したものの、その共通点はただ一つ、誰も実体験でこのグランド・キャニオン川下りを経験したことがないことだった。こうなると、自分の付き合いの友人関係の中で、一番に経

験できる名誉を感じ、ますますやる気が出てくる、まったく究極のポジティブ思考である。

どんなツアー形態をとろうとも、グランド・キャニオンの川下りには、年間 20,000 人しか許可を出さないらしいので、30 年間経っても単純計算で延べ 60 万人。この内、1 割の人はリピーターと思われるので、経験者総数は 54 万人。人口 3 億人のこの国で、たかだか 54 万人の経験者しか 30 年間に生み出さないということは、1000 人の知り合いのうち経験者は 1.8 人という計算になる。これでは、そうそう実体験を持つ人に会うことはない訳だ。

【グランド・キャニオンと私たちが住むシカゴの位置関係】



第二章 旅行準備

普段、どんな家族旅行に出かけようとも、基本的に何か忘れ物が出れば、「現地調達」が可能である。ところが、グランド・キャニオンの底では、店舗はおろか、電気もガスも何もない。お金がどれだけあっても、「現地調達」は全く不可能である。したがって、準備は念入りに進めねばならない。

ツアー会社から、何を準備すべきかというリストをもらい、それにならって不足物資を次々に購入していく。これが、案外お金のかかる部分でもある。しかし、この旅行を最も楽しみにしている私にとっては、楽しい買い物となっていた。Bass Pro Shop (バス・プロ・ショップ)、Cabela's (キャベラス)、REI、DICK's (ディックス) などあちこちのアウトドア・グッズの有名チェーン店に行っては、リストの中で気に入ったものを買出しに行く。

最終的には、漏れがないように、チェックリストを作成し、それを冷蔵庫に貼り付けて、その準備の進捗が見えるようにした。まさに、仕事感覚である。仕事も、このぐらいわくわくしながらチェックリストを作って、準備工程を潰し込んでいければ、さぞいい仕事ができるに違いないとも思った。買出しは、低調にスタートしたが、本格的にしっかりし始めたのは、一ヶ月ほど前のことである。それでも、こんなに前から旅行の準備をするということ自体、普段前日にしか旅行の準備をしない自分としては「超特別対応」であった。

もう一つ、厄介なことが残っていた。旅行保険である。90日前には旅行代金の全額を納めきってしまうため、何か不測の事態が発生し、旅行への参加が不可能になったときには、返金がツアー会社からは見込めない。ツアー会社も乗客側で旅行保険に入り、カバーされることを推奨している。「不測の事態」とは、何が考えられるだろう。家族

のメンバーが病気になること。飛行機が天候不良で飛ばない。機材の故障でキャンセルになり、後続のフライトも翌日まで満杯とか。目的地の天候が問題で着けないとか。その場合は、ラスベガスまで急遽飛んで、何とかなるか…。いろいろ考えをめぐらせている内に、まずは最高のカバレッジができる保険の期限が過ぎた。最終的には、前日でも入ることで、7割ほどが戻ってくるプランもあったので、「誰かが病気になってから入るか…」ぐらいの楽観主義で、結局保険には一切入らなかった。

そう言えば、申し込みに際しては、どんなことがあっても（命を落としたとしても）、ツアー会社に責任がないことを認めるようサインをさせられることになっている。この書類にサインするとき、いささかの戸惑いがどうしても隠せない。本当にこんなことに家族を全員巻き込んでよいのだろうか。船から投げ出されて、命を落とす確率が高いのは、やはり7歳の亜美である。拓実は小さい頃からスイミング教室に通い、泳ぎは得意である。亜美は、そのようなプロセスを経ていないので、浮き輪なしで泳ぐことができない。常に、亜美の隣でサポートしてあげねばならないだろうと思っていた。「何もリスクのことを考えてくれない」ときつと妻などは思っていたらと思うが、それなりに答えの出ないシミュレーションはたくさん頭の中を駆け巡ってはいた。

一方、女性ならではの悩みも妻にはある。30台後半になり、お肌の曲がり角を幾度か曲がった後で、炎天下で日陰もない中、一週間も紫外線に肌をさらすことは辛い。ノーメイクの顔を他人にさらして一週間過ごすことも気乗りのすることではない。申し訳ないが、その懸念は男には親身になって分かってあげられることではなかった。抗紫外線加工の長袖衣服や、日焼け止め、ツバの広い帽子などを最大の防御策として、何とかしてもらうしかなかった。

必要とされているギアの中で、シーツ2枚があった。夜が暑くて寝られないときに、寝袋に入るというのも暑過ぎ